HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	米国の未婚のシングルマザーに関するディスコースとその反証 ; Promises I Can Keep (2005) が示唆するもの
Author(s)	鈴木, 佳代
Citation	教育福祉研究, 17, 51-64
Issue Date	2011-11-01
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/47424
Type	bulletin (article)
File Information	SUZUKI.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

[Journal of Education and Social Work No.17 2011
教育福祉研究　第17号　2011]

米国の未婚シングルマザーに関するディスコースとその反証
―*Promises I Can Keep*（2005）が示唆するもの―

鈴　木　佳　代

1．はじめに

過去数十年間、アメリカ合衆国の深刻な社会病理に数えられてきた事象のひとつに、未婚出産がある。西洋社会の中でも宗教の影響力が強いアメリカでは、婚姻関係外の性関係を否認するキリスト教的性道徳ともあいまって、未婚で子どもを生む女性にはしばしば非難の目が向けられてきた。しかし現実には、未婚出産は1960年代以降増え続けており、2008年には40.6％の赤ん坊が未婚の母親のもとに生まれていた（Hamilton, Martin, and Ventura 2010）。これほど広まった現象に対して人々がいまだに眉をひそめるのは、未婚出産が圧倒的に低所得層やマイノリティに多く見られ、それに関連したさまざまなディスコースがあるからだと考えられる。たとえば、多くのミドルクラスの人々は、若くして未婚で子どもを生む女性は、教育を受けてよい仕事を得るという選択肢を自らつぶしていると考える。また、貧しい女性は働かずして福祉給付金を受け取りたいがために、意図的に妊娠・出産しているのだという批判もある。

社会的不利を負った階層やグループに対する特有の厳しいまなざしは、アメリカという国や未婚出産という事象に限られたものではない。日本では近年、貧困や格差の問題がよく語られているが、貧困について論じられる際、所得が低いという状態のみが語られることはあまりないように思われる。たとえばホームレスであれば労働意欲のなさが問題視されるし、離別女性に対しては「男を見る目」のなさや忍耐力のなさが批判されがちである。つまり、そこには個人の選択や資質に対して他者が下す価値判断がついて回るのだ。

米国においては、未婚出生率の増加と同時に婚姻率全般の低下が見られたことで、主に二つの批判が生まれた。ひとつは、未婚で妊娠・出産する女性は貞操観念や性に関する節度を持ち合わせていないというものであり、もうひとつは、彼女たちは結婚の意味や価値を軽視しているから、未婚で子どもを生むのだというものである。しかし、緻密なフィールドワークを中心とする近年の調査により、そうした批判のかなりの部分は神話―現実とは異なるにも関わらず、広く信じられている言説―であることが明らかになってきた。

こうした調査が現実をひもとく例として、本稿ではキャスリン・イディンとマリア・ケファラスが2005年に出版した*Promises I Can Keep: Why Poor Women Put Motherhood Before Marriage*を紹介する（以下、*PICK*と称する）。この本は、2名の若手女性研究者が8年近くかけて行ったフィールドワークとインタビューに基づいており、文章の読みやすさも手伝って、アメリカの大学では家族社会学や社会階層論のテキストとしてベストセラーになった。ここで*PICK*を日本に紹介することには、二つの意味があると考える。ひとつは、アメリカ社会における未婚出産の現状や議論を中心に、米国社会に関する知見を広げること、そしてもうひとつは、社会的周縁にいる人々の暮らしや選択に関するディスコースの歪みを解き明かすモデルケースの一例とすることである。

2．未婚シングルマザーをめぐる議論

冒頭で述べたように、今日の米国における未婚出生率（全出生のうち、母親が未婚であるものの割合）は非常に高い。1950年代までは5％程度に

すぎなかった未婚出生率は、1960年から1990年代半ばにかけて増え続け、1990年代後半にいったん30%台前半で停滞したものの、2000年代に入ると再度増加し、2008年にはついに4割を超えるまでになった（Ventura 2009; Hamilton, Martin, and Ventura 2010）。

未婚出産の最も顕著な社会的特徴は、それが社会階層の低い人びとに多く見られる家族形成パターンだという点である。たとえば、1995年の全米抽出調査NSFG（全米家庭発展調査）によると、出産時に結婚していた母親では高校中退者が13%、短大・大卒者が30%だったのに対し、未婚の母親では高校中退者が43%を占め、短大・大卒者は5%に過ぎなかった（South 1999）。

また、人種やエスニックグループによっても未婚出生率は大きく異なっており、特に黒人女性は未婚出産をすることが多い。2007年の未婚出生率は、白人女性で28.6%だったのに対し、黒人女性では72.3%、ヒスパニック女性では52.5%、ネイティブ・アメリカンでは65.8%、アジア人とパシフィック・アイランダーでは16.9%だった（Hamilton, Martin, and Ventura 2010）。

年齢と未婚出産の関係について見てみると、多くのアメリカ人は現在でも、「未婚の母＝若い母親」というイメージを持っている。しかし、過去半世紀のあいだに著しく増加したのは成人女性の未婚出産であり、未婚出産者のうち10代女性が占める割合は、1975年の52%から2008年の22%にまで減少した。しかし、若くして母親になる女性ほど未婚率が高いため、若年出産が未婚出産増加の原因であるかのように誤解されがちなのである（Hamilton, Martin, and Ventura 2010）[1]。

社会階層や人種、年齢に関わらず、未婚で出産すれば、母親はシングルマザーとして子どもを育てることになる。実際には未婚の母親のうち、白人の半数、黒人でも5分の1が、出産の時点で子どもの父親である男性と同棲しているのだが（Sassler and Cunningham 2009）、同棲カップルの紐帯は既婚カップルのそれに比べて弱い傾向があるため[2]、法的に結婚することなく出産した母親は、不安定な家庭環境の中で子育てをするリスクを負うことになる。さらに、単親世帯で育った子どもは既婚の実両親と暮らしている子どもにくらべて生活水準や学力が劣り、問題行動を起こしやすい傾向があるという研究結果も示されている（McLanahan and Sandefur 1994; Thomson, Hanson, and McLanahan 1994など）。

（1）未婚出産に対する政策

未婚で子どもを生めばさまざまな不利が生じるのは自明のことに思われるのに、なぜ結婚せずに出産するのか―これはミドルクラス市民や国家にとって、不可解かつ不愉快な疑問である。1990年代半ばから2008年までのアメリカ政府は、未婚出産の根本原因を解明しようとするよりも、未婚出産をてっとりばやく減らそうとすることに尽力していた。1996年の福祉改革では未婚出産の大幅削減を明確に打ち出した政策がとられ、純潔教育のみを行う性教育プログラムに連邦予算が割り当てられることになった[3]。また、ブッシュ政権は2002年以降、州や私的団体が実施する結婚教育プログラムに年額15億ドルの連邦基金を投じ、婚姻推進政策を推し進めてきた。しかし、これらの政策に対しては、純潔教育だけでは若者が本当に必要としている知識を身に付けられない可能性がある（Haskins and Bevan 1997）、両親の結婚が貧困や子どもの問題を解消するという主張の因果関係を明確に提示した研究結果がない（Dailard 2005; Lichter, Graefe, and Brown 2003; Luker 1996）、結婚促進プログラムは伝統的家庭像を信奉する人々の信条のみによって推し進められており、その効力について具体的な評価が示されていない（McLanahan et al. 2010）などの問題点が指摘されていた。

一方でオバマ政権においては、結婚しているか否かではなく、家庭の機能を強化することに重点を置く政策転換が行われた。つまり、ブッシュ政権下では既婚実親家庭が「正しい」家族のあり方とされていたのに対し、新政権は家族形態に関わらず父親の実子に対する扶養義務を強化することで、多様な家族の経済的安定をはかろうとしてい

る（McLanahan et al. 2010; Administration for Children and Families 2010）。さらに、家族支援や結婚促進をめざすプログラムへの連邦資金の供与は継続されているものの、供与を希望する州や団体は競合的審査を受けなければならず、プログラムの成果についても国から評価されるようになった（McLanahan et al. 2010）。したがって、子どもの福祉を向上させるという目的から見れば、現在の政策はより現実的で効果的なものになったと言える。

しかし、家庭とその周辺での諸問題についてどのような政策的対応がとられようと、なぜ4割もの子どもが未婚の母親のもとに生まれてくるようになったのか、その原因やメカニズムははっきりと理解されていないままである。一方で多くの人、特に保守派は、未婚出産は社会にとって大きな負担を強いるものであり、公共道徳に反する行為だと考え続けている。

（2）理論的見解

こうした背景を受け、多くの社会科学者が未婚出産の原因を解き明かそうとしてきた。そこには二通りのアプローチがある。ひとつはなぜ女性が結婚しないのかに焦点を置いたもの、もうひとつはなぜ不利を抱えた女性ほど未婚で出産しがちなのかに焦点を置いたものである。ここでは前者に関する三つの理論と、後者に関する二つの理論を紹介する。

結婚の衰退に関する第一の理論は、経済学者ゲイリー・ベッカーが提唱した結婚の最大利益モデルである（Becker 1981）。ベッカーは、結婚生活においては夫が稼得労働に、妻が家事労働に専念するかたちで家庭内分業を行うのが最も効率的であると唱えた。さらに彼は、この分業は経済的な最大利益を生むばかりでなく、配偶者が互いの機能を補い合うため、夫婦の強い紐帯を生むと主張した。この理論によれば、結婚衰退の原因は、女性の社会進出と経済的自立によってこの専業的性別役割分業がくずれ、女性が結婚しなくても生きていけるようになったことにある。しかし、その後オッペンハイマーが行った複数の実証研究では、この理論は支持されなかった。むしろ、男女の性別役割が極度に分業的な場合よりも、女性も経済的稼得を持つ場合のほうが、結婚の可能性が高まることがわかったのだ（Oppenheimer 1994; 1997）。

第二の理論である福祉手当仮説は、チャールズ・マレーが1980年代半ばに提唱した（Murray 1984）。彼は1970年代に福祉受給額の拡大と未婚出産の増加が同時に起こったことをふまえ、福祉国家の拡大と低所得シングルマザーへの福祉手当の拡充が、結婚の衰退とシングルマザーの増加を引き起こしたのだと主張した。しかし、この仮説も実証をともなわないものだった。実際には福祉が拡大したのは1970年代初頭だけであり、その後は給付金の実質価値が下がり続けたため、仮説自体が現実にそぐわないものになったばかりでなく、各州の統計でも福祉給付金の増減や多寡と未婚出生率の間に有意な相関は見られなかったのだ（Bane and Ellwood 1994; Hoffman and Foster 1997; Moffitt 1995）。さらに、1996年の福祉改革により母子世帯への福祉手当は大幅に削減されたが、未婚出生率が下がることはなく、むしろ2000年代には未婚出産が増加の一途をたどった（Graefe and Lichter 2008）。

結婚衰退に関する第三の説明は、ウィリアム・J・ウィルソンが提唱した婚姻可能男性プール仮説である。ウィルソンは、脱工業化による製造業の衰退と工場の郊外・海外移転により、かつては安定した収入を得ていた都市中心部のワーキングクラス男性が仕事を失い、一家の稼ぎ手になりうるだけの稼得力を得られなくなったせいで、女性から「結婚するだけの能力がある（marriageable）」とみなされる未婚男性集団が小さくなったために、未婚出産が急増したのだと主張した。この主張はその後の実証研究でも支持され、脱工業化やグローバル化が個人生活に与える影響の大きさを示すことになった（Guzzo 2006; Harknett 2008; Lloyd and South 1996）。

未婚出産が社会的不利層で多いことに焦点をあてた理論のひとつは、機会費用（実際にはとらな

かった選択肢の中から得られたかもしれない最大利益）という経済学の概念を用いたものである。クリスティン・ルカーは、「家庭生活の黄金期」と呼ばれる1950年代には3分の1の女性が10代で第一子を生んでいたこと、そしてその後のミドルクラス女性の初産年齢が上昇の一途をたどったことから、1950年代的な出産規範から逸脱していったのはむしろミドルクラス女性だったことを明らかにした[4]。高等教育を受ける機会が開かれたミドルクラス女性にとっては、キャリアを築く前に出産すれば、将来得られるはずだった経済的利益が大きく損なわれかねない。さらに、今日のミドルクラス層の多くは、共働きをすることで高い生活水準を維持しているため、シングルマザーになることは、ミドルクラスの暮らしをあきらめることにつながる（Appelbaum et al. 2002）。一方、高等教育やキャリア形成を通じた社会的上昇が見込めそうにない貧しい少女は、自分が20代後半や30代になるまで出産しないでいたところで得られるものはほとんどないと考えるため、若いうちに出産することをためらわない。

未婚出産の階層性に関するもうひとつの理論は、避妊の知識や実行可能性に階層差があるというものである。婚前交渉はあらゆる階層の若者に広まったが[5]、貧しい者や人種的マイノリティの若者は性行為の開始年齢が低い傾向があり、効果的な避妊を用いるのが遅く、避妊をし始めても毎回きちんと用いない傾向がある（Luker 1996）。こうした行動の背景としてルカーは、伝統的なジェンダー役割において受身であることが期待されてきた女性が自分から避妊を言い出すのが難しいこと、貧困層やマイノリティにとっては避妊の知識や手段を手に入れるうえでさまざまな障壁が存在すること、そして、カップルが避妊について話し合うような安定した関係になっていないうちに性行為をすることで、交際初期の妊娠リスクが高くなってしまうことなどをあげている。

3．*Promises I Can Keep* の手法と発見

（1）調査方法

PICK の著者であるイディンとケファラスは、こうした先行研究の知見をふまえた上で、フィラデルフィア市とその周辺の八つの貧困地区で調査を行った。フィラデルフィアを調査地として選んだのには二つの理由があった。ひとつは、フィラデルフィアが米国第5の大都市であるばかりでなく、近年の米国社会に大きな変化をもたらした工業衰退が顕著で、未婚出産率も極めて高かったからである[6]。もうひとつの理由は、人種やエスニシティの枠を超えた生活状態の類似性である。アメリカの他都市では、貧困層の白人が比較的恵まれた収入層と混じって暮らし、学校、公園、レクリエーション施設、仕事、治安などの面で、同程度の収入層に属するマイノリティよりも恵まれた環境を享受する傾向があるが、フィラデルフィア周辺ではあまりに貧困率が高いせいで、貧困層の白人、黒人、ヒスパニック（主にプエルトリコ人）がほぼ同様の環境下で暮らしていたため、三つのグループをほぼ同列に比較できると著者らは考えたのだ。

ライフヒストリーや自分の生活について、シングルマザー自身に語ってもらうという目的を達成するため、著者らは長期間地域に入り込んで緻密な観察とライフヒストリーの聞き取りを行うという方法をとった。1995年の夏に研究基金が下りると、イディンはある調査地区内のアパートを借り、自分の家族とともに2年半そこで暮らした。彼女は地域の教会に家族と一緒に加わり、放課後や夏休み中の少年雇用プログラムでボランティアとして働き、地域のさまざまな職業の人々と話をした。地元で買い物や外食をし、日曜学校で教え、地域の行事に参加する中で、彼女は地域住民の生活を観察するだけでなく、こうした地域で暮らすことで受けるストレスの一部を、身をもって体験した。一方ケファラスは、調査2年目に最初の子どもを妊娠したことで、思いがけずシングルマザーたちの出産観やライフコース観を知ることができた。

「(彼女たちの) ほとんどは、(ケファラスは) もう30歳なのだから妊娠するのは難しいだろうと考えており」、「30代になるまで出産しないことを選択する女性がいるということ自体が信じられなかった」のだ［Edin and Kefalas 1996: 23］。

二人は、まず地元の商店主、草の根運動団体の代表、私的ソーシャルサービス団体などとつながりをつくり、そこから低所得シングルマザーと接触をもった。さらにこうした母親からの紹介で、黒人・白人・プエルトリコ人の人種グループから各50-60人ずつ、計162人の女性と出会い、詳細なインタビューを行った。インタビューの対象としたのは、福祉受給者か低賃金労働者であるために前年度収入が当時の米国の貧困線である16000ドルより少なく、少なくとも一人は18歳未満の同居児童がおり、インタビュー時点で法的に結婚していなかった女性である[7]。調査は、普段の何気ないやり取りに加え、それぞれの母親と少なくとも２回、各２－３時間の詳細なインタビューをする形で行われた[8]。

（２）調査結果と結論

イディンとケファラスはこうした調査を通じて、フィラデルフィア周辺の若い女性が子どもの父親となる男性とどうやって出会い、妊娠・出産の過程でどんな関係の変化を経験して、今どんな状況にあるのか、そして母親になることで彼女たちの人生がどう変わったかを理解していった。その具体的な過程やシングルマザーとなった女性たちの心情については、原書で詳細に描かれているので、そちらを読んでいただきたいが、ここでは*PICK* の発見のあらましを紹介し、調査結果と引用を用いて既存の理論を検証したうえで、著者らの理論的解釈をまとめたい。

一言で言えば、フィラデルフィア貧困地域の女性たちが未婚で子どもを生むのは、安全で安定した結婚生活を脅かす要素があまりにも多いために、たとえ子どもができても、安定した結婚生活が送れると確信するまでは結婚しないからである。彼女たちの周辺では、既婚者は希少な存在であり尊敬を集めるが、離婚は究極の失態と見なされるため、パートナーと添い遂げられないかもしれないという不安材料があれば、結婚には消極的になるのだ。

「離婚したっていう大きな傷痕は作りたくないの。『私はこんな大馬鹿野郎と結婚してました』っていうくらいなら、『そうよ、子どもたちは結婚しないで生んだわ』って言うほうがまし。プライドの問題かな。」（24歳白人・５歳と４歳の子の母）［Edin and Kefalas 1996: 120］

たとえば、金銭問題は *PICK* に登場する女性のほぼ全員が持つ懸念である。彼女たちは、金銭問題はカップルの関係にとって破壊的なものであり、「貧しいけれど幸せな結婚」というのはありえないと考えている。彼女たちに言わせれば、お金のことが解決できていないのに結婚するのは、離婚して後ろ指をさされる道へとみずから乗り出すようなものなのだ。こうした声は、ミドルクラスの人々が貧しい人たちに対してしばしば期待する、清貧で愛情深い暮らしというものが、実際には実現困難であることを示している。また、下記１）で述べるように、パートナーからの暴力・浮気・麻薬・犯罪行為など、金銭問題以外にも解決すべき問題は山積している。

一方で、女性たちは子どもを持つことを強く望み、いつかは幸せな結婚をしたいと願っている。それは、日々の生活に四苦八苦し、人生に希望を見つけ出すことさえ困難な彼女たちのコミュニティにおいて、赤ん坊はこれから育っていく可能性の象徴であり、結婚はひとかどの暮らしを手に入れたというサクセス・ストーリーの象徴だからである。著者らはこうまとめる。「貧しい人々の世界観では、今でも結婚と階層的地位は普通切り離せないものである。したがって、貧しいシングルマザーが結婚というゴールをあきらめたと口に出すことは、より良い未来を夢見ることをあきらめたと認めるも同然なのだ」［Edin and Kefalas 1996: 202］。こうした価値観からすれば、「貧しい人々が結婚しないのは、結婚を軽視しているからだ」という見方は大きな誤りであることがわかる。むしろ彼女たちは、結婚とは決して崩してはなら

ない神聖な紐帯だと考えており、結婚の誓いは絶対に守るべきだと信じている。だからこそ、誓いが守れないくらいなら、はじめから結婚したくないと考えるのだ[9]。

「どうして結婚するの？　男と女の間にはいろんなことがあるじゃない。正直言って、昔のことを考えるとね…。あの人とは4年間一緒にいて、子どももできたけど、それでも別れちゃったもの。守れないような約束なんて、あたしはしないわ。」（21歳白人・2歳半の子の母）［Edin and Kefalas 1996: 107］

だからといって、こうした女性たちは、未婚で子どもを生むのが正しいことだとか、最善の選択だとか考えているわけではない。実際に、インタビューを受けた母親の8割以上は、子どもが欲しい人はまず結婚すべきだと思うと言っている。しかし、彼女たちの現実は、こうした抽象論とはほとんど無縁なものである。結婚市場を支配する原則のひとつは同類婚（似たような社会経済的地位を持つ男女が結婚すること）であり、貧困地域で生まれ育ちさまざまな不利を背負った女性にとって、実際に手が届く相手とは、同様に不利を背負った男性なのだ[10]。そうした男性が安定した稼得を持つことは難しく、暴力や浮気、麻薬や酒、犯罪行為や逮捕・収監などの問題を抱えていることも多い。女性の妊娠はある意味で相手の男性の器をはかる試金石となるが、たとえ男性が夫候補や父親候補として不合格でも、多くの女性は子どもをあきらめはしない。詳しくは下記2）で述べるが、貧しい女性は結婚をぜいたく品―いつかは手に入れたいが、なければないでやっていけるもの―とみなす一方で、子どもは人生にとっての必需品だと考える傾向がある。妊娠した女性は、できればこの機会に相手の男性と幸せな家庭を築きたいと望むが、たとえそれができなくても、子どもを生むチャンスは逃したくないと考えるのだ。

1）性別役割分業理論の検証

母親たちの声は、結婚の夢と経済達成とが強く結びついていることを示唆している。しかし、性別役割分業こそが効率的であり夫婦の結びつきを強めるというベッカーの説に反し、*PICK* の調査結果からは、幸せな結婚生活のためには女性自身が収入を持つことが重要だという女性たちの声が聞こえてくる。女性が経済力を持つことの意味を、著者らは次のようにまとめている。「彼女たちにとって結婚とは、ちゃんとした物質的所有物（経済的安定と社会的上昇の象徴としての：筆者注）を持つことだけではない。むしろ、カップルの関係が間違いなく一定の質を保てるようにすることこそが大切なのである。おそらくそれ以上に重要なのは、結婚生活がうまく行かなくなった場合に自分が確実に生き残れるようにすることだ」［Edin and Kefalas 1996: 203］。彼女たちのパートナーは、浮気、家庭内暴力、薬物乱用、犯罪など、結婚生活を破綻させかねない行為にいつ誘惑されるともわからないため、いざというための備えをしておくことは、きわめて現実的な課題なのである。

また、貧しい女性たちはミドルクラスの女性と同様に、「対等な関係」をパートナーに求めているが、貧しいコミュニティの男性のジェンダー意識は旧態依然としているため、結婚することで束縛が強まったり、自分の意見が聞き入れられなくなったりするのではないかと危惧することも多い。

「だって結婚したら旦那に自分のもの扱いされるようになって後悔するから。最近の男はみんなそうなのよ。女の子を自分の所有物みたいに考えてる。『こいつは俺のかみさんだ、そんなことさせやしない、俺がそう言ってるんだからな』って。私の彼はまさにそうだったの。『こいつは俺のだ、触るなよ』みたいな。」（17歳白人・2歳の子の母）［Edin and Kefalas 1996: 117］

「いい仕事に就きたいわね。彼が出て行っちゃっても何とかなるって思えるように。頭金とか全部、私の名義にするわ。」（19歳黒人・1歳の子の母）［Edin and Kefalas 1996: 113］

結婚する前に経済力をつけることには、日々のやりくりに困らないようにするだけでなく、自分の発言権や権力を確保するという意味もあるの

だ。自分自身の収入と資産を持っている女性は、自分の希望を通すよう主張することができるし、いざとなれば自分から相手と別れることもできる。こうした視点から見れば、女性の経済的自立を否定するベッカーのモデルは、女性の権利や権力を奪う、きわめてリスクの高い関係性の上に成り立っていることがわかる。

2）福祉手当仮説の検証

インタビューを受けた162名の母親のうち、半数近くは過去2年の間に現金福祉給付を受けたことがあり、半数はインタビュー時、仕事にも学校にも行っていなかった。しかし、福祉を受けたくて妊娠・出産したという発言は、*PICK* のどこにも見当たらない。むしろ、子どもを生んだ理由として女性たちが強調したのは、金銭的利益以外のところで子どもが自分にもたらしてくれるもの―人生の目的や生きがい、壊れることのない互恵的な愛情にみちた関係、心理的・情緒的なニーズを満たしてくれる存在―だった。著者らは、社会的低階層の人々はミドルクラスの人々にくらべ、子どもを持つことを非常に重視すると指摘している。「貧しい人々は、子どもがいないことを人生最大の悲劇のひとつだと見なす。…（大規模調査によれば）子どもがいない人生は空虚だと思うと答える人は、大学教育を受けた人にくらべ、女性では高校中退者で5倍以上、男性では高校中退者で4倍以上だった。…貧しいインナーシティのコミュニティに住むほとんどの女性にとって、子どもがいないままでいることは想像すらできないのだ」［Edin and Kefalas 1996: 204-205］。

貧しい人々が子どもに大きな価値を見出す理由を、著者らは二つあげる。ひとつは、子どもを生むことと引き換えに失いかねないもの―輝かしいキャリアや、高収入や、職業的地位など―を貧しい女性は持っておらず、子どもを「授かりもの」として歓迎するためである。むしろ、ストレスに満ちた暮らしの中で、赤ん坊は生活にはりを持たせ、期待や希望を抱かせてくれるのだ。もうひとつは、輝かしい職業的アイデンティティや地位を手に入れられない貧しい女性にとって、子育ては人生で最もやりがいのある仕事のひとつと見なされるからである。また、母親としての役目を立派に果たすことは、道徳心を持つ賢い大人として、若い女性がコミュニティから承認と尊敬を得る手段となるのだ。

3）婚姻可能男性プール仮説の検証

都市の貧困地域には仕事がなく、暴力や麻薬、犯罪行為があふれている。また高い収監率や死亡率のせいで若い男性が減り、相対的に女性が多い状態にあるため、男性は交際相手や浮気相手を見つけるのに不自由しない。そこで暮らす女性たちは決して高望みをしているわけではないのだが、こうした環境の中で、きちんと仕事をしてそれなりの給料をもらい、麻薬や酒におぼれず、浮気をせず、他の女性との間に子どものいない男性を見つけるのは容易ではない。どんな男性と結婚したいか尋ねられると、母親たちからは次のような言葉が返ってくる。

「私と子どもたちを受け入れてくれて、大事にしてくれて、私をゴミクズみたいに扱わなくて、ちゃんとした仕事についてる人。ヤク中じゃないこと、麻薬を売ってないこと、浮気をしないこと。必要なときにそばにいてくれる人。でもね、そんな人を探すのって大変なのよ。」（18歳白人・5ヶ月の子の母）［Edin and Kefalas 1996: 129］

「正直言って、カムデンではそんな人見つけられないかも。うんと遠くに行かないと見つからないんじゃない？」（18歳黒人・3歳と1歳半の子の母）［Edin and Kefalas 1996: 130］

こうした声を聞けば、「もっとまともな相手を探せばいいのに」という批判は的外れなことがわかる。自分の手の届く範囲には「まともな相手」などめったにいないというのが、こうした女性たちが直面している現実なのだ。ここで重要なのは、ウィルソンの提唱した「婚姻可能性」が男性の稼得能力のみに注目していたのに対し、彼女たちは結婚相手の条件として、暴力をふるわない、浮気をしない、自分や子どもを大切にしてくれる、麻薬や酒の問題がないといった、男性の資質や行動

についてもあげていることである[11)]。いくら稼ぎがよくても、他に問題がある男性は、結婚相手としてふさわしいとは見なされないのだ。

4）機会費用理論の検証

機会費用理論は、*PICK* の全編を通じて支持されている。2）の福祉手当仮説に対する反証でも示されたように、貧しい女性の多くは、子どもを生むことで大きな犠牲を払わなければならないとは考えていないので、若年や未婚で出産することをためらわない。実際に、シングルマザーになった多くの少女は、妊娠する前からすでに勉強に行き詰まったり退学したりしていた。彼女たちには、大学に行き華々しいキャリアを築いて高収入を得る見込みなど、元々なかったのだ。また、こうした女性たちの母親や家族にしてみても、娘の妊娠を嘆いたところで、彼女が学士号や専門職、高収入を得る可能性はどのみちほとんどなかったことがわかっているため、娘の出産や子育てを積極的に支援する姿勢に出る。

フィラデルフィアの貧困地域に住む女性にとっては、出産することだけでなく、結婚しないことで失うと見込まれるものもはるかに少ない。彼女たちの人生に関わる男性の多くが、3）で記述したようなさまざまな問題を抱えていることからすれば、結婚したところで生活が向上する保障はなく、むしろ暴力・精神的不安・自由や権利の喪失などの問題にさらされかねないからだ。

さらに印象的なのは、鬱や低学力に苦しんでいたり、麻薬や酒におぼれていたりした女性の多くが、子どもが生まれたことで落ち着きや規律を取り戻し、生活を立て直すことができたと語ることだ。

「次の日ハイになること以外、生きる目的なんてなかったわ。意味も楽しみもない人生だった。友達もなくしちゃったし—みんな私にはもううんざりだったの。仕事もクビになりそうだったし、二つめの大学も中退しちゃってた…。今は『私には可愛い女の子がいるのよ！』って感じ。朝起きるとワクワクするの！」(28 歳白人・9 ヶ月の子の母)［Edin and Kefalas 1996: 172］

彼女たちは子どもの存在によって自分が将来得られるはずだった収入や地位を失ったとは考えていない。むしろ、子どもを生んだことで退廃的だった人生から立ち直ることができた、つまり未婚出産が自分の展望に対してポジティブに働いたと考えているのである。

5）避妊の不徹底仮説の検証

PICK の調査対象者の中で、自分の妊娠は意図的なものだったとか、避妊をした上での純粋な事故だったと形容した女性は少数派であり、最も多かった回答は、「『意図的に計画していた』わけでも、『完全に防ごうとしていた』わけでもでもなく」妊娠したというものだった［Edin and Kefalas 1996: 37］。

PICK の調査結果がルカーのそれと異なっている第一の点は、女性たちが避妊に関する十分な知識を持っており、地域の家族計画センターやクリニックのサービスについてもよく知っていたことである。したがって、避妊の知識や避妊法へのアクセスが欠落しているために妊娠するという説明は成り立たないように思われる。

第二の差異は、ルカーが交際初期ほど妊娠のリスクが高いという結論を出したのに対し、*PICK* では交際の初期ほど避妊をきちんとしており、相手との関係が進むにつれて、避妊をしなくなったり、避妊がいい加減になったりしがちであるという結果が出たことである。著者らはその理由として、交際期間が長くなり相手との関係が深まったと女性が感じると、妊娠が次に来るべきステップとして浮上することや、初めは慎重に使っていたピルやホルモン剤が体に合わなかったり面倒になったりして、それらの使用をやめてしまう女性がいることをあげる。避妊がおざなりになることには、彼女たちの環境やそれまでの人生、現在のライフスタイルなどが密接に関わっている。実現できそうな具体的な将来の夢や職業があるわけではなく、破天荒な生活の中で妊娠することさえ気にしなかったり、周囲に尊敬できるシングルマザーのロールモデルがいたりする中では、妊娠は絶対に避けるべきものとは認識されていないの

だ。したがって、相手との交際が長期に及ぶほど、避妊に対する注意深さがなくなっていくのである。

6）結婚の文化的変容と未婚出産の増加

上記1）から5）では、既存の理論に関する *PICK* の検証をまとめたが、なぜ都市部の貧しい女性たちは未婚で子どもを生むのかという疑問に対し、それらはどれも決定的な答えを与えてはいない。この疑問に対する著者らの最終的な理論的回答は、結婚の持つ意味が変わったからだというものである。この回答は、アメリカにおいて結婚の実用的意義が減り、象徴的意義が増大したという、アンドリュー・チャーリンの説を基礎に置いている。チャーリンによれば、アメリカ社会は、生き残りや社会的承認といった機能的目的のために結婚していた時代(20世紀初頭まで)、夫婦愛が強まったものの伝統的な性別役割から逸脱することが許されなかった時代（1920-1950年代）を経て、結婚するかどうかやどんな結婚生活を送るかを個人が選択する時代（1960年代以降）を迎えた(Cherlin 2004)。つまり結婚は、自己実現と自己表現の手段へと変化したのである。

著者らは、こうした文化的変容の中で、結婚は個人やカップルにとって、出発点ではなくゴールになったのだと説明する。つまり今日では、結婚とは男女双方が経済的・職業的安定を手に入れており、相手と協調して家庭を築いていく準備ができていることを意味するのだ。貧しい人々が目標とする収入や仕事はささやかなものだが、それすら達成することが難しい彼らにとって、結婚できる状態とは、一段上の生活水準や安定したカップルの関係、成功を象徴する結婚式といったものすべてが手に入った状態を意味する。こうした文化的変容は、結婚を貧しい人にとって手の届きにくいものにしてしまった[12]。したがって、結婚の夢を実現するために必要な物質的資源や金銭的資源、望ましい相手を持たない人々は、家族形成において以前とは異なる戦略をとらざるを得なくなった。具体的には、貧しい女性は結婚する時期を何年も遅らせることで、男性が20代後半・30代と年を重ねて無茶な行動をとらなくなるのを待ち、生活を安定させられるだけの力を自分が蓄えたと感じたところで結婚するのである。実際に、未婚出産した女性の70%以上は、40歳までに結婚している—ただし、結婚相手が第一子の父親であることはめったにないが［Edin and Kefalas 1996: 111］。ある若いシングルマザーとのインタビュー中に口を挟んできた彼女の母親の言葉は、こうした戦略を如実に物語っている。

「結婚するのにベストなのは、40過ぎてからよ。浮気とかってのは、もっと若いときにするでしょ。40過ぎれば、そんなチャンスは残ってないからね。そうすれば落ち着く準備もできてるだろうし、私みたいにさ。私は今42歳だけど、この8月に結婚するの。私はもうやることはやりつくしたし。もう十分。ほかに何も探さなくなるのよ。別の男とか女とかね。今はもうそういうのには飽き飽きしたから、それで結婚するわけ。あんたはまだ自分の人生を生きてないんだから、今すぐ結婚したりしちゃだめよ。その人が自分がずっと一緒にいたい相手だなんてどうしてわかるっていうの？」(42歳黒人・幼児をもつ17歳の娘の母親)［Edin and Kefalas 1996: 110-111］

その一方で、貧しい女性は、結婚するまで子どもを持たずにいたら、子どものいない人生を過ごさなければならないかも知れないと考える。彼女たちの価値観においては、子どもは光であり、生きがいであり、社会的承認を得るための手段でもある。自分の子どもを生み育てることを強く願っている彼女たちは、妊娠した場合にはそのチャンスを逃したくないと考え、たとえ未婚であっても子どもを生もうと決意するのだ。

4．おわりに—PICKが示唆するもの—

PICK は、貧しいシングルマザーたちを美化して描いているわけではない。たとえば、麻薬のせいで子どもをネグレクトしたことがある母親や、虐待を行う男性から子どもを守れなかったと告白する母親も少数ながらいることが記されているし、母親たちが子どもの欲しがるものを十分に与

えてやれない様子も描かれている。それでもほとんどの母親は、彼女たちなりの基準に照らして良い母親であろうと努力し、自分や子どもの人生をよりよいものにしようと頑張っていると言っており、また著者らの目にもそう映っている。結婚をめぐる文化的変容という視点を携えて貧困地域の女性の人生や選択を見てみると、彼女たちが結婚を軽視しているとか、福祉に依存しようとしているとか、努力が足りないとか、道徳心に欠けるといった説明では、未婚出産の増加を説明できないことに気付く。むしろ彼女たちはミドルクラス的な暮らしを切望しているにも関わらず、それが叶わないために、手の届く数少ない選択肢の中から、未婚で子どもを生み育てることを選ぶのだ。こうした捉え方をすれば、こうした女性たちがただ環境に翻弄されるばかりでなく、時間をかけて信頼できる男性を見極めようとしたり、経済的自立をめざしたりする中で、人生をできる限り望ましいものにしようと奮闘している姿が見えてくる。

また *PICK* は、既存の研究で見えていなかったさまざまなことを明らかにしたという点でも、未婚出産に関するわれわれの理解を深めることに貢献している。第一の発見は、未婚出産をとりまく問題に関する既存の研究において、経済的側面ばかりが注目され、暴力・浮気・酒や麻薬といった他の問題が見落とされがちだったことである[13]。第二に *PICK* は、貧しい未婚女性の妊娠が、福祉受給の意図や避妊に関する無知からではなく、恋人との関係の深まりや、立派に母親業を果たしているシングルマザーへの尊敬、妊娠することで自分が何かを失うとは思えない状況などが絡み合った複雑なダイナミクスの中で起こることを明らかにした。第三に、彼女たちの妊娠や出産は機会費用の低さから消去法的に起こっただけでなく、人生を前向きなものへと変え、より生産的で前向きになるためのターニング・ポイントの役割を果たしている場合も多いことを明らかにした。これらはどれも、母親自身の口から自分の人生や考え方について語ってもらうことなくしては得られなかった見方である。

こうしてまとめてみると、未婚出産をめぐる既存のディスコースや学問的理論の多くは、ミドルクラスの主観的価値判断に彩られたものだったことがわかる。イディンとケファラスがそうした価値判断から一歩離れて、未婚出産に関する理解を深めることに成功したのはなぜだろう？

既存の調査の多くは、統計的分析を主目的とした大規模調査であり、質的調査であっても、インタビュアーが対象者と面会し、数時間インタビューを行って質問項目の回答のみを持ち帰るという形をとっていた[14]。それに対し、*PICK* の著者らは調査地域の中で日常を過ごすことで新たな見方を得たり、対象者の人生の舞台の詳細を身を持って理解したりしていった。事実、彼女たちは、子どもを産んだことに対する後悔の言葉が次々発せられることを予想して、「子どもを生んでいなかったら自分の人生はどうなっていたと思うか」という質問項目を作ったのだが、ほとんどの母親が「子どものいない人生など考えられない」と答えることに当初は驚いた。しかし調査を続け、彼女たちの人生やその背景について知るうちに、なぜ多くの母親が「子どもは自分の人生をポジティブなものに変えてくれた」と言うのかを理解できるようになったと言っている。また、長期間にわたる調査中、ケファラス自身が妊娠し、共通の話題ができたことも、シングルマザーたちとの距離を縮め、妊娠や出産について核心にせまる回答を得るのに役立った。こうした人間どうしのやり取りの中で対象者にとって身近な存在となり、信頼感を深めることで、かなり本音に近いところで母親自身の視点からライフヒストリーを語ってもらえたことが、既存の研究では引き出せなかった視点を本書が描き出すのに成功した鍵であったと思われる。

PICK は未婚出産について多くの情報を与えてくれる一方で、課題を示してもいる。第一は、子どもの父親となる男性の視点が欠けていることである。もちろん、本書の目的が自分の人生や決断について母親に語ってもらうことにあったことからすれば、それは当然のことではある。しかし、

彼女たちの見方が明らかになればなるほど、相手の男性は同じ出来事をどのようにとらえ、自分自身や相手の女性、子どもの人生をどう見ているのかという疑問がわきあがってくる。たとえば *PICK* では、希望や機会に乏しい貧困コミュニティでは、若い未婚男性も多くが女性と同様に子どもを欲しがっているが、恋人の妊娠を知るとショックや動揺、怒りや否定を示しがちであると書かれている。また、子どもの誕生時には、心を入れ替えてよい父親になろうと多くの男性が誓うが、ほとんどの場合その約束は守られないことも描かれている。著者らはそれを、身体的変化が起きる女性にくらべて親になる実感が薄いことや、期待の大きさに耐えられないことで説明するが、父親になることや貧困地域で生きていくことを男性自身がどう捉えているのかは、やはり彼らの口から語ってもらう必要があるだろう。

第二の課題は、人種やエスニシティによって利用できる資源が大きく異なる環境においては、未婚出産を取り巻く文脈において階層と人種がどう作用しているのかが、*PICK* では描かれていないことである。*PICK* では白人・黒人・プエルトリコ人が一様に貧しいフィラデルフィアを調査拠点とすることで、貧しい女性たちは人種やエスニシティにかかわらず、未婚出産や人生展望について同じような見方をしているという大きな発見があった。しかし現実には、低所得層の白人がマイノリティと同程度に収奪された環境下で暮らしていることはむしろ例外的である。したがって、アメリカにおける未婚出産の現実に迫るには、低所得層の白人が比較的多くの利益を享受している、より典型的な都市において、各人種グループの男女が出産や結婚をどうとらえ、彼らの実際の人生がどのように展開しているのかを調べることが必要だと考えられる。

こうした課題を残しつつも、*PICK* が社会科学全般、とりわけ「メインストリームから逸脱している」「劣っている」といった価値判断を受けがちな層やグループに関する学問的調査や理論付けに対して、教示してくれるところは大きい。そのひとつは、社会的に抑圧・排除されがちな人々の行動や選択に関する理論やディスコースは、しばしば社会的に大きな力を持つ人々―ミドルクラスやアッパーミドルクラスの研究者・評論家・政治家など―の目線から生まれたものであり、当事者の生活や価値観を反映していない可能性があるという教訓である。

また、調査者が長期にわたり対象者と間近で接し、対象者のコミュニティの一員となって生活の苦労や不安を理解することで初めて見えてくるものがあることを、*PICK* は示している。もちろん、こうした研究のための研究基金を獲得し、調査者自身が長期にわたって私生活を調査活動に捧げるのは、容易なことではない。また、芋づる式に対象者とコンタクトをとることで、きわめて不利な状況におかれて孤立した人々にはスポットライトが当たりにくいといった問題もあるかもしれない。しかし、こうした地を這うような研究なしには、社会的周縁に置かれてきた人々の経験や視点を理解することはできないというメッセージを、この本は発しているのではないだろうか。

注

1）Hamilton, Martin, and Ventura (2010)によると、2008 年に出産した女性のうち、25-29 歳で未婚だったのは 33.2%だったのに対し、10 代では 86.7%が未婚だった。

2）Bumpass and Lu (2000)は、同棲カップルはその後結婚したものを含めても、半数以上が 5 年以内に破綻すると報告している。

3）詳細は拙著（2002）を参照。

4）Mathews and Hamilton (2009)の報告によれば、初産時の母親の年齢の全米平均は、1970 年の 21.4 歳から 2005 年には 25.0 歳にまで上昇した。

5）このことからすれば、性に関する節度がない低階層の女性だけが妊娠するのだという認識は誤りであることがわかる。さらに、Hayes (1987)や Cooksey (1990)の研究から、裕福な少女や勉強のできる少女は、妊娠した際に中絶を選択しがちであるために、未婚の母になりにくいこともわかっている。

6）2000年時点でのフィラデルフィア周辺の未婚出産率は62%で、当時の全国平均の二倍だった。

7）インタビューを受けた女性には、離別シングルマザーも含まれていた。

8）インタビューに応じたシングルマザーの年齢は平均25歳で、最低年齢は15歳、最高年齢は56歳だった。45%は高校の卒業証書を持っていなかったが、15%はGED(高卒程度認定資格)をとっており、3分の1近い女性が大学、看護助手、教育助手、美容学校など、何らかの高卒後教育を受けた経験があった。ただしこれは彼女たちが卒業したり資格を取得したことを意味するものではない。母親たちの4分の3近く(73%)は第一子を10代のときに産んでおり、25歳未満の母親は平均1.6人、25歳以上の母親は平均3.1人の子どもを産んでいた。

9）*PICK* の調査に参加した母親の7割は、いずれは結婚したいと明言している。一方で、結婚するつもりはないと言った母親（17%）や、どちらともいえないと答えた母親（13%）の多くは、過去にひどい浮気をされたトラウマや離婚への恐怖、結婚することで束縛や支配が強まることへの不安を理由にあげている。さらに、結婚したことがない女性にくらべ、過去に実際に結婚していた女性は、今後の結婚に対して消極的であることが多かった。

10）同類婚についてはKalmijn (1998)が詳しくまとめている。同類婚が起こる要因として、Kalmijnは(1) 配偶者に求める特徴の好み、(2) 配偶者選考にあたっての第三者の介入、(3) 配偶者探しにあたっての結婚市場上での制約をあげている。たとえば、貧困地区に住む女性がミドルクラスの男性と結婚したいと願っても、相手が求める学歴や収入を持っていない可能性が高いし、相手の親に結婚を反対されるかもしれない。また、行動範囲が異なるため、出会いの機会すらないかもしれない。

11）Ellwood and Jencks (2002)、Moffitt (2000)、Oppenheimer (2000)等によれば、結婚が激減した原因のうち、男性の雇用喪失や稼得減少で説明できる部分は20%程度である。

12）この解釈は、結婚せずに子どもを生んだ両親に結婚しない事情を尋ねた調査でも支持されている。たとえばGibson-Davis, Edin, and McLanahan (2006)やEdin and Reed (2005)は、立派な結婚式を挙げることの意味や経済的安定の重要性が異口同音に語られること、経済的不安定さや所得の低さが結婚の足枷となっていることを示唆している。

13）金銭問題はカップルの関係が破綻する理由の一因にはなるが、主原因となることはまれであると著者らは述べている。「怠け者だったり浪費癖のある彼氏は確かに問題をさらに悪化させる—特に経済的な周縁に近いところで暮らす家族にとっては—が、母親は家族を引き裂いた主な原因として、それよりもはるかに深刻な問題を指摘する。貧しい母親たちが関係破綻の原因としてあげる最大の悪因は、麻薬やアルコールの乱用、犯罪行動やそれにともなう収監、繰り返される浮気である」[Edin and Kefalas 2005: 81]。

14）たとえば、全米抽出縦断調査であるNSFG（The National Survey of Family Growth 全米家庭発展調査）やPSID（Panel Study of Income Dynamics 収入ダイナミクスパネル調査）では対面式インタビューが、未婚の両親と子どもを縦断的に調査するFragile Families and Child Wellbeing Study（脆弱家庭と子どもの福祉調査）では対面および電話によるインタビューが行われているが、それらはいずれもフォーマルな調査票に基づくものであり、調査票の質問項目以外に関する情報は得られない。また、調査者と対象者との接触は、ほぼインタビュー時に限られている。これらの大規模調査の詳細は以下のウェブサイトで閲覧できる。

NSFG　http://www.cdc.gov/nchs/nsfg.htm

PSID　http://psidonline.isr.umich.edu/

Fragile Families and Child Wellbeing Study http://www.fragilefamilies.princeton.edu/study_design.asp

参考文献

Appelbaum, Eileen, Thomas Baily, Peter Berg, and Arne L. Kalleberg. (2002) *Shared Work, Valued Care: New Norms for Organizing Market Work and Unpaid Care Work.* Washington, D. C.: Eco-

nomic Policy Institute.

Administration for Children and Families. The Office of Child Support Enforcement. (2010) The Fatherhood, Marriage, and Families Innovation Fund. http://www.acf.hhs.gov/programs/cse/pubs/2010/Innovation_Fund_One_Pager.html

Bane, Mary J. and David T. Ellwood. (1994) *Welfare Realities: From Rhetoric to Reform*. Cambridge, Harvard University Press.

Becker, Gary S. (1981) *A Treatise on the Family*. Cambridge: Harvard University Press.

Bumpuss, Larry and Hsien-Hen Lu. (2000) Trends in Cohabitation and Implications for Children's Family Contexts in the United States. *Population Studies*, 54(1), 29-41.

Cherlin, Andrew J. (2004) The Deinstitutionalization of American Marriage. *Journal of Marriage and Family,* 66, 848-861.

Cooksey, Elizabeth. (1990) Factors in the Resolution of Adolescent Premarital Pregnancies. *Demography*, 27(2), 207-218.

Dailard, Cynthia. (2005) Reproductive Health Advocates and Marriage Promotion: Asserting a Stake in the Debate. The Guttmacher Report on Public Policy, 8(1) http://www.guttmacher.org/pubs/tgr/08/1/gr080101.html

Edin, Kathryn and Maria Kefalas. (2005) *Promises I Can Keep: Why Poor Women Put Motherhood Before Marriage*. Berkeley and Los Angeles, CA: University of California Press.

Edin, Kathryn and Joanna M. Reed. (2005) Why Don't They Just Get Married?: Barriers to Marriage among the Disadvantaged. *The Future of Children,* 15(2), 117-137.

Ellwood, David and Christopher Jencks. (2002) The Spread of Single-Parent Families in the United States Since 1960. Cambridge, Mass: Harvard University. Working paper. John F. Kennedy School of Government.

Gibson-Davis, Christina, Katheryn Edin, and Sara McLanahan. (2006) High Hopes but Even Higher Expectations: The Retreat from Marriage among Low-Income Couples. *Journal of Marriage and Family,* 67, 1301-1312.

Graefe, Deborah R. and Daniel T. Lichter. (2002) Marriage among Unwed Mothers: Whites, Blacks, and Hispanics Compared. *Perspectives on Sexual and Reproductive Health*, 34, 286-293.

———. (2008) Marriage Patterns among Unwed Mothers: Before and After PRWORA. *Journal of Policy Analysis and Management*, 27(3), 479-497.

Guzzo, Karen B. (2006) How Do Marriage Market Conditions Affect Entrance into Cohabitation vs. Marriage? *Social Science Research*, 35, 332-355.

Hamilton, Brady E., Joyce A. Martin, and Stephanie J. Ventura. (2010) Births: Preliminary Data for 2008. National Vital Statistics Reports, 58(16) http://www.cdc.gov/nchs/data/nvsr/nvsr58/nvsr58_16.pdf

Harknett, Kristen. (2008) Mate Availability and Unmarried Parent Relationships. *Demography*, 45(3), 555-571.

Haskins, Ron and Carol S. Bevan. (1997) Abstinence Education under Welfare Reform. *Children and Youth Review*, 19(5-6), 465-484.

Hayes, Cheryl D., ed. (1987) *Risking the Future: Adolescent Sexuality, Pregnancy, and Childbearing*. Washington, D. C.: National Academy Press.

Hoffman, Saul D. and E. Mitchel Foster. (1997) Nonmarital Births and Single Mothers: Cohort Trends in the Dynamics of Nonmarital Childbearing. *The History of the Family*, 2(3), 255-275.

Kalmijn, Matthis. (1998) Intermarriage and Homogamy: Causes, Patterns, Trends. *Annual Review of Sociology*, 24, 395-421.

Lichter, Daniel T., Deborah R. Graefe, and J. Brian Brown. (2003) Is Marriage a Panacea?: Union Formation among Economically Disadvantaged Unwed Mothers. *Social Problems*, 50(1), 60-86.

Lloyd, Kim M. and Scott J. South. (1996) Contextual Influences on Young Men's Transition to First Marriage. *Social Forces*, 74(3), 1097-1119.

Luker, Kristin. (1996) *Dubious Conceptions: The Politics of Teenage Pregnancy*. Cambridge, MA: Harvard University Press.

Mathews T. J. and Brady E. Hamilton. (2009) Delayed childbearing: More women are having their first child later in life. NCHS data brief, No. 21. Hyattsville, MD: National Center for Health Statistics. http://www.cdc.gov/nchs/data/databriefs/db21.htm

McLanahan, Sara, Ron Haskins, Irwin Garfinkel, Ronald B. Mincy, and Elisabeth Donahue. (2010) Strengthening Fragile Families. In The Future of Children: Policy Brief 2010. http://www.brookings.edu/reports/2010/1027_fragile_families_foc.aspx

McLanahan, Sarah and Gary Sandefur. (1994) *Growing Up with a Single Parent: What Hurts, What Helps*. Cambridge, MA: Harvard University Press.

Moffitt, Robert. (1995) The Effect of the Welfare System on Nonmarital Childbearing. In National Center for Health Statistics, *Report to Congress on Out-of Wedlock Childbearing*. Washington, DC: U.S. Department of Health and Human Services, 167-176.

———. (2000) Female Wages, Male Wages, and the Economic Model of Marriage: The Basic Evidence. In *The Ties That Bind: Perspectives on Marriage and Cohabitation*, ed. Linda J. Waite, 302-319.

Murray, Charles A. (1984) *Losing Ground: American Social Policy, 1950-1980*. New York : Basic Books.

Musick, Kelly, A. (1999) Determinants of Planned and Unplanned Childbearing among Unmarried Women in the United States. Center for Demography and Ecology Working Paper No. 99-09. http://www.ssc.wisc.edu/cde/cdewp/99-09.pdf

Oppenheimer, Valerie K. (1994) Women's Rising Employment and the Future of the Family in Industrial Societies. *Population and Development Review,* 20(2). 293-342.

———. (1997) Women's Employment and the Gain to Marriage: The Specialization and Trading Model. *Annual Review of Sociology,* 23, 431-453.

———. (2000) Cohabiting and Marriage Formation during Young Men's Career Development Process. *Demography*, 40, 127-149.

Sassler, Sharon and Anna Cunningham. (2008) How Cohabitors View Childbearing. *Sociological Perspectives,* 51(1), 3-28.

South, Scott J. (1999) Historical Changes and Life Course Variation in the Determinants of Premarital Childbearing. *Journal of Marriage and the Family,* 61(3), 752-763.

鈴木佳代(2002)「アメリカの性教育プログラム—その社会的背景と分析」『教育福祉研究』8、95-105。

Thomson, Elizabeth, Thomas L. Hanson, and Sara S. McLanahan. (1994) Family Structure and Child Well-Being: Economic Resources vs. Parental Behaviors. *Social Forces,* 73, 221-242.

Ventura, Stephanie J. (2009) Changing Patterns of Nonmarital Childbearing in the United States. U. S. Department of Health and Human Services, Centers for Disease Control and Prevention. (DHHS Data Brief No. 18). http://www.cdc.gov/nchs/data/databriefs/db18.pdf

Wilson, William Julius. (1987) *The Truly Disadvantaged: The Inner City, the Underclass, and Public Policy*. Chicago, IL: University of Chicago Press.

———. (1996) *When Work Disappears: The World of the New Urban Poor*. New York: Alfred A. Knopf.

（日本福祉大学健康社会研究センター・主任研究員）